文学教育のためにいま私たちができること

一柳廣孝
高芝麻子

〔はじめに〕

国語研究の最終号の特集は「専門から見た今後の国語日本語教育の課題」となった。本論は、共著者二名が横浜国立大学教育学部の国語専門領域で文学を担当する立場から、文学研究の専門性に拠り、文学教育の課題について検討するものである。テーマに即した具体的な提言をするべく、二〇二一年八月十二日、横浜国立大学教育学研究科の修士課程の修了生である四人の若手教員から現場の声を聞いた。以下はその座談会での現場の声と、そこで言及された様々な問題意識に対する近現代文学・漢文学の研究者の応答から成る。

〔出席者〕

大鋸洋樹（二〇一八年三月修了／近現代文学専攻／神奈川県立西湘高校）
宮田滉大（二〇一九年三月修了／漢文学専攻／神奈川県立西湘高校）
C（二〇一九年三月修了／国語教育学専攻／神奈川県内の定時制高校）
T（二〇一九年三月修了／漢文学専攻／神奈川県内の中学校）
一柳廣孝（横浜国立大学教育学部教授／近現代文学）
高芝麻子（横浜国立大学教育学部准教授／漢文学）

座談会

【1】国語の授業を行う上で困っていることについて教えてください。

高芝「本日はお集まりいただきありがとうございました。早速ですがみなさんが現場に出て感じている国語の授業における困難さについて伺いたいと思います。」

宮田（以下宮）「勤務先は進学校なので、授業が教材ベースになります。受験のことを常に考え、テストに間に合わすことが優先されてしまうので、興味関心を引くということが難しいですね。」

大鋸（以下大）「生徒のニーズと自分の思いがかみ合わないのが悩みの種です。文学の面白さを、いろんな角度から見せていきたいのですが、生徒は『テストでどの問題が出るの？』というところが気になってしまうので。」

宮「評価のことを考えると面白いというだけでは授業で扱っていくのが難しい内容も多いのですが、それでも面白いことをやれば、面白いと思ってくれる子はいます。」

高芝「面白いことというのは、例えばどういうことですか？」

宮「自分の場合でいえば、教科書に載っていないものを読む、例えば『枕草子』であれば、教科書に載っていない章段を読ませるとか、『枕草子』と『徒然草』を比較させるとか。」

大「同じできごとを書いているのに、他の書かれ方をしているものを比較したりすると、興味を持ってくれますね。例えば漢文なら『史記』の中から鴻門の会に関する部分をいくつか持ってきて読み比べるとか。」

宮「大学院でやったことをそのまま活かしているのが多いですね。自分が面白いと思ったことが生徒にも面白いと受け止められる気がします。」

大「高校三年生を受け持ったので、一柳先生の中等国語科教育法（高芝注：現在の中等教科教育法（国語））でやった内容の高校版みたいなこともやりました。新しい読みを考えさせ、議論させるとか。」

C「授業の工夫のためのストックが大学院でやったことしかなくて困っています。大学院までやったこと以上のことを学ぶ余裕が今はなくて。」

宮「確かに、大学院できちんとやらなかったから、詩や俳句を授業で扱うのは厳しいですね。」

C「詩とかは国語教育の学会で見たものを使っています。とにかく、授業を考えていくためのとっ

かかりは大学院で学んだことしかないですね。」

大「今でも困ったらciniとかで検索してヒントを捜しています。」

C「川上弘美の「神様」は、何度も使ってしまいます。困ったら「神様」。」

〔コラム1　一柳〕

コロナ禍以前の中等国語科教育法では、小説教材の分析を課題としていました。数名のメンバーでグループ学習を行い、発表するという形式です。発表は、先行研究を踏まえたうえで作品の新しい読みを提示するというものです。分析対象は芥川龍之介と太宰治の短編。作品はこちらで複数用意し、各グループはそのなかから適宜選択します。発表時間は三十分前後。発表終了後、発表グループ以外のグループは発表内容に対してグループ内で議論し、質問をまとめます。発表グループは指導教員を交え、質問されるであろう内容を精査し、質問に対する事前準備を進めます。グループ内での議論は二十分程度。議論終了後、発表グループはふたたび教壇に上がり、各グループからの質問に応えます。芥川作品では「羅生門」「蜜柑」「トロッコ」、太宰作品では「走れメロス」といった定番教材も扱います。その結果、中学や高校で学ぶ作品の読みがいかに限定されたものであるか、また、小説の読みの世界がいかに広大であるかを実感することになるはずです。それは同時に、彼らが先生となり、教室で生徒に小説を教えるさい、学習指導要領によって示された教材の学習内容の「外側」を意識することに繋がります。この意識こそが、教室で「文学の面白さ」をアピールしていく原動力になると思っています。

高芝「皆さんは大学院で学んだことから授業を組み立てているというお話でしたが、大学院に行かずに教員となった先生方はどのように授業のネタを捜しているのでしょう。」

大「年上の方だと、経験が豊富だからいろいろなことができるように見えます。初任の先生方は学部で学んできた内容と指導書をベースにして工夫しているようです。」

C「自分は他の先生の授業は知らないですね。」

T「他の先生の授業をなるべく自分は見に行くようにしています。でも独特の工夫はすごいなと

思っても、真似できないし、授業も先生ごとに多種多様すぎて。」

宮「研究授業だけしか見に行かないです。」

大「その代わり、研究授業はよく見に行きますね。」

C「周りの先生を見ていると、知識あるなと思います。」

大「先輩の先生が、新しい範囲を教えなくてはならなかったとき、全体像をやるのは無理だから、新しい範囲の中で自分が得意なところだけピックアップして勉強し、授業をしているのを見ました。具体的には古典が専門の先生が近現代文学史を教えるとき、谷崎潤一郎にフォーカスしていて、そういう勉強方法もあるのだなと。」

宮「うちは生徒がしっかりしているから、教科書をそのまま読んでいるだけでも授業になってしまうのですよね。でも、しっかり準備している授業はわかってくれます。」

大「だから、授業が楽しみと言われると嬉しいですね。トップクラスの進学校に比べれば、授業を見る目が厳しいというほどではないのですが、生徒たちは授業をきちんと見て、評価しているように思います。」

宮「大鋸先生の授業、よく誉められているじゃないですか。」

大（照れる。）

〔コラム2　一柳〕

決められた内容をいかにわかりやすく、面白く教えるかという実践的な手法については、さまざまな現場を経験し、その現場に即した多様な実践を積み重ねることが重要でしょうね。生徒の習熟度によって当然教える事柄も変わってきますし、教室の状況もそれこそ日によって変化する訳ですから。こうした実践的なテクニックを数多く取得することが必要なのは、言うまでもありません。ただその一方で、大学院で学んだ皆さんの強みは、指導要領で指示されている「教えなければならない事柄」を客観視し、相対化できることかと思います。よりグローバルな視点があって、初めて「教えなければならない事柄」を「教えたい事柄」に溶かし込むことができるのではないでしょうか。

〔コラム3　高芝〕

「文学史」を教えるというのは、非常に難しいことのように思います。私個人の感覚としては、文学について学べば学ぶほど、作品を読めば読むほど、自分は「文学史」などというものを理解できていないのではないかという気がしてきたというのが正直なところです。その「文学史」を、中学校や高等学校の国語の授業で、時間も限られている中で学ぶとなると、多くの場合、作家の名前や代表作品がぼんやり生徒たちの記憶に残るくらいかもしれません。しかし、大学の全学教育科目（一般教養）などで中国古典の授業をやっていると「今日の授業では何となく見たことのある名前が出てきたから興味を持って聞くことができた」または「今日の授業は知らない人ばかりだったのでつまらなかった」というリアクションが、学生たちからしばしば寄せられます。この「何となく見たことのある名前」というのは中学校や高等学校の国語の授業で文学史のテストのために覚えた名前なのではないかと私は想像しています。もしかしたら彼らはかつて受けた文学史の授業の最中には、「今日の授業は知らない人ばかりだったのでつまらなかった」と思っていたかもしれません。でも、そこでその名前に出会っていたから、彼らは大学で「何となく見たことのある名前」として、その作家その作品に興味を抱き、前向きに授業に取り組むことができたのだろうと思うのです。そうであれば、その学生がいつか遠い将来、興味を持てない「知らない人」として私の授業で出会った名前に何かの機会で再会したとき、「何となく見たことのある名前」としてその「知らない人」は彼らの前に立ち現れてきて、興味を持ってもらえる可能性があるわけです。何となく知っているということが、知的好奇心のスイッチになりえるとすれば、「文学史」という大きすぎる存在を学ぶ中で、喩えその一部だけしか生徒の記憶に残らなかったとしても、それはきっと彼らの人生を豊かにするのではないかなと私は想像し、期待しています。

高芝「準備をしている授業、というのはどのようなものですか。」

宮「新しい読みを提示していくとか。他の先生のやっていた手法ですが、例えば物語を読む場

合、この物語は『〜の小説』という形でまとめるようにしています。『〜の小説』というまとめ方によって、教室でその物語を読む意義、子どもたちだけではたどり着けない読みというのが提示できるようにしたい。その小説に対する研究などをきちんと把握していないとそれはできませんね。」

大「小説教材は教訓があるとか、作者の考えを知るとか、それを少しずつ崩していくわけです。解答がひとつだけの方が教える側は楽だけど、固定観念を打ち破れると楽しんでもらえます。」

高芝「固定観念を打ち破るというお話について、大学生でも、古典を読ませるとすぐに教訓を読み取りたがる現状があるように感じているのですが、何がそのような傾向を生んでしまっているのでしょうか。」

大「テストで小説を扱うと答えが必要になるんですよね。羅生門はエゴイズムの話、というような。教訓にする、価値づけるというのがテストで評価していくためには大事になってくるので。」

宮「古典とか教訓を示してオチを付けるものが多いですし。」

T「そのオチから現代につなげていこうとすることが多いですね。『今でも役に立ちそうな考え方だから、現代のどういうことに使えそうか考えてみよう』とか。今に引きつけるために教訓はとても便利なんです。今の教育現場では『教材で何を教えるのか』が強調されているので、物語そのものを深めるのではなく、教材『で』という点がどうしても重要視された結果かもしれません。」

C「でも、大事なのは国語が繰り返しの教科だということでは。いろいろな読み方・書き方・話し方を知る、その積み重ねが大事だから、何を読むか、読んだものの中身がやはり何より大事だと思います。」

宮「汎用性の高い読み方とかを教えてみたいのだけれど、読むものによってはそれが使えないこともありますね。そういったものにこだわりすぎると説明ができなくなるというか、例えば説明文として出ている教材は実はほとんどエッセイなので、説明的文章の授業にならない。」

C「それはわかります。説明的文章の指導に使えないんですよね。」

宮「そう、だから、汎用性の高い読み方が使えないんです。」

C

「国語は読んで考えることの繰り返し、いろいろな読み方があって、いろいろな考え方があるよね、という経験を積み重ねるしかないと思うんです。自分はそうやって成長してきた気がします。」

宮

「大学院で一緒だった人（高芝注：現職教員）に『教材で教える』ということに信念を持つ人がいて、名作かどうかはこだわらなくてもいいと考えていたけど、でも名作には名作とされる所以があると気づいたという話を聞いたことがあって。名作の所以というのは、その作品にしかないものがある、その作品でしか教えられないことがある、そういうものに触れていく、それが大事なんだと、その先生が言っていたことがすごく印象に残っています。そういったものをどこまで探せるかが大切だと思います。」

〔コラム4　高芝〕

以前、大学一年生の基礎演習という授業で、まず出版社のPR誌を紹介し、そこに掲載された販売促進用の「書籍の紹介文」を読んで、「書いた人は何を伝えたかったのだろうか」と問いかけたことがあります。グループワークで挑んでもらったのですが、「伝えたかったこと」として、一度目の挑戦では、学生たちはいずれのグループも紹介文の要約を提出しました。「紹介文に直接書いていないけど、伝えたい大事なことがあるんじゃないかな」と問いかけると、一部のグループはその書籍の内容紹介から教訓を読み取ろうとし始めました。「この本をみんなに読んでほしいから、とてもいい本だと伝えたい」という、たどりついてみれば当たり前の答えが一人の学生から小さな声で提案されたのは二回目のグループワークの終盤のころ。そこから「何だ、そんなことか」と全てのグループが納得するまでに時間はかかりませんでした。

テキストそのものを作者や文脈から切り離して虚心に読むことは重要です。教訓的な文章から的確に教訓を読み取るというのはもちろん大切ですし、古典世界と現代とに様々な共通項があることに気づくなどの出会いも国語の重要な役割だと思います。でもそれと、「文章には書かれた文脈がある」というのを忘れてしまうのとは、別のことです。それぞれの文章には「教訓を伝えたかった」以外にも実に様々な「誰が何のために誰に何

を伝えたくて書いたのか」があったはずです。文学、特に古典の世界では「変なの」と拒絶したくなるような、信じられない、理解したくないような価値観の相違に出会うことがあります。しかし、その「変なの」は間違いなく誰かが書いたもので、その人にはその人なりの「変なの」を書く必然がありました。そうであれば、「昔の人はこう考えたんだね」で終わらないで、「変なの」という違和感から「何でこんなふうに考えたのだろう」を掘り下げていくことで、いろいろと見えてくるものがあるのではないかとも思います。現代との共通点を見るだけでなく、断絶を見るという視点にも、学びを現代に繋げ、現代を見つめるためのヒントがあります。大学で漢文を教える上で、国語の免許を取得していく学生が「昔の価値観に共感できないので、自分は現代に生きていてよかったと思いました」という感想で立ち止まってしまうことがないよう、こういった違和感を大切にしたいと考えています。

【2】今、国語の現場でやりたいこと・面白いことについて教えてください。

大　「さっきも話しましたが、一柳先生の中等国語科教育法みたいな授業が面白いと思っています。短編をいくつか用意して、各班で読み合い、『新しい読みを提示していこう』と。もちろん高校生だから、研究史は大学生のようには追えなくてネットの知識くらいに留まってしまいますが、それでも生徒たちは面白がって、新しい読み方を見つけてこようとしてくれます。『総合的な探究の時間』に近いことが国語ではできるんです。これからの国語は探究活動に接続していくのがいいと考えています。答えのない問いに対して答えを探すことが大切なので。実用文ばかりが新しい国語でフォーカスされていますが、古典も近現代文学も探究と相性が抜群だし、答えのない問いと向き合える科目です。探究を推していく文科省の方針は、決して文学を縮小することでは達成できないと思うんです。」

一柳　「とはいえ、『文学国語』や『古典探究』は授業として採用しにくいと聞いていますが。」

大　「『文学国語』『古典探究』が四単位は重すぎますね。それぞれ二単位に分割して、一、二年で履修させるとか、なるべく今までに近い流れで採らせたい、という声が多いです。受験のことを

考えれば『古典探究』を外す選択肢はないのではないかと。」

C「そのあたり、定時のシステムだとより難しい面があります。それでも何とか対応するために、『論理国語』『文学国語』を軸にした学校設定科目を合計4単位にするなどの方法をとるのかなと。」

T「探究につながるところだと思うのですが、中学でやっていて楽しいことは、作らせる活動ですね。ロイロノートなどICTを活用して、しんどいことは多いけど、工夫してやっています。文学の内容をこういうのだよと説明するとポカンとするけど、話の続きとかを作らせると盛り上がるんです。俳句を作らせて自分で解説を書かせてみると、途端にやる気を出してくれる。作者について、便覧だけで知識を確認させていたけど、自由に調べさせると、便覧などでは大きく取り上げられていない河東碧梧桐などを熱心に調べてきたりする。そういった活動の中で、教員が知らないことまで調べてきてくれることもあります。対応していくのはとても大変だけど楽しいのはそういう授業です。漢文ではまだそういう授業はできていないけれど、漢文についても調べるきっかけを作ってあげたいと思っています。」

大「自分たちが生徒だったときと比べて、ネット環境が格段に進歩して、調べ学習をしやすくなっているのも大きいですよね。何でもネットで調べられる時代になっていますから。」

宮「でも本当は本を見てほしいなと。図書館を使ってほしいというところはありますね。」

大「生徒はネットを信じすぎていますからね。」

〔コラム5　一柳〕

ネット情報の扱い方は難しいですね。玉石混交ということを、まずは徹底して認知させないとまずい。本の利点は、本となるまでのプロセスで多くの人が目を通して情報のチェックを行う点です。著者のまとめた原稿を編集者が読み、意見を返す。著者はそれをもとに原稿を書き直す。そういうキャッチボールが何度もおこなわれた後、さらに活字となった原稿を二度、三度とチェックする。校正作業ですね。大手の出版社だとこの間に、その出版社の校閲部が原稿をチェックする。原稿が本になるには、このような気の遠くなる過

程を経ている訳です。ところがネットの場合、すでに書物になっている百科事典がひっかかることもあれば、そのへんの誰かが思い付きで書いたことが、事実の検証もなく読まれてしまう。このあたりの違いは、知っている人からすれば当たり前の事柄ですが、知らなければ同列に見なされてしまう。怖いですね。

T「生徒たちは本を読んでいてもすぐ飽きちゃうんですよね。」

C「読み物が長いと無理。」

T「だから授業でも、手短に、一つが一時間で終わるものでないと、取り組ませられないという課題があって。スタートで内容に入ってこられないんです。」

C「そういう点で、ゲームは面白いなと思います。話すこと、聞くことを面白くやるのは難しいような気がするし、ゲームを上手くやろう、成功させようとするところに、国語の力が生まれてくるんじゃないかなと。漢詩をカードで作らせる教材もやってみたのですが、普段よくできる子は、上手く作ろうとして時間がかかるけど、普段はあまりやれない子がさっさと並べ終えていたりするんです。こういうゲーム教材ならば、参加しやすく『わからない』となりにくいように感じます。」

T「他の先生に言われたことですが、最初のつかみで国語は決まるということを、自分はすごく意識しています。」

宮「導入で面白そうじゃん、と思わせるの大事ですよね。だから自分は古典の授業のとき、最初に現代語訳を配って、学習のハードルを下げるようにしています。」

T「現代語訳は配る人と配らない人がいますよね。」

C「自分の場合は授業のゴールが『こういう話だったんだね』というところなので、現代語訳は配らないですね。でも現代語訳を配らないと、四面楚歌の話とか複雑な内容だと、結局どうだったかというところが、伝わりにくいときもあります。」

宮「現代語訳を見ても、それで全ての内容がわかるわけではないから、『なんでこう訳してあると思う?』とかやると面白いと思うんですよね。あとは、『山月記』を読むなら『人虎伝』も読ませたいなとか。今、勤務先は一コマ六十五分

でやっているから意外とそういうことができるんです。袁傷のキャラクターの違いなどを比較していくとか、『人虎伝』から『山月記』への改変の意味とか、自我とか、そういったところに着目して。」

C「読み比べさせたら、『人虎伝』の方が分かりやすくて好き、という生徒がいました。『人虎伝』はできごとベースなので分かりやすいけれど、中島敦は虎になるまでの内面を詳しく書いているから理解できないんですね。」

宮「『人虎伝』もそうだけど、文学は教科書の外から持ってきたものと比較すると盛り上がりますよね。」

大「物語はそう。でも評論はそういう形で授業を準備するのは難しいんです。自分ごとにはなるのですが、比較していく材料を見つけてこられるかというと、そこが大変。」

C「対立する主張を読み比べるとか。」

宮「文学だと先行研究を読んでいけばちょうどいい比較対象が見つかるけど、評論はそういう視点で論じられていないから、関連資料を読み込んでも、授業で比較して読むのにちょうどいい文章を見つけるというのができなくて、比較する授業をやりたくても、題材を見つけるのが大変。」

大「そうなると、評論はどうしても背景知識の方にいってしまうんですよね。近代とは、人間とは、理性とは、そういったところに着目させることになります。」

宮「そういうのは教員側が時間をかけてきちんと勉強しないと、授業できないですからね。やはり大変なんですよね。」

〔コラム6　高校〕

文部科学省「高等学校学習指導要領（平成三十年告示）解説　国語編」（平成三十年七月）第二章第六節「古典探求」の「〔思考力、判断力、表現力等〕A　読むこと」に例示されている言語活動の中には「(2)ウ　古典を読み、その語彙や表現の技法などを参考にして、和歌や俳諧、漢詩を創作したり、体験したことや感じたことを文語で書いたりする活動」が含まれています。しかし、高等学校の国語で実際に漢詩の実作指導を行った例は短歌・俳句に比べて著しく少ないのではないでしょうか。原因はいろいろと考えられますが、漢詩実作は難易度が高く、授業で扱うこと

は難しいという先入観が原因の一つとしてあるように思います。漢詩はルールが多く複雑だというのは事実です。その困難の克服に向けた提案として、以前、漢詩の詩語をカード化し、ゲーム感覚でグループワークで取り組める教材を作成しました。毎年の授業で体験してもらうとともに、希望する学生や卒業生には実物を提供しており、座談会でCさんが触れているのもその教材のことです（詳細は「漢詩実作教材「漢詩カード」試論　中学校・高等学校での教材として」（『横浜国大国語教育研究』43号P2-10、二〇一七年三月）参照）。漢詩は古典で、しかも和語ではなく全てが漢語で構成され、さらには詩歌というジャンルであって、つまり国語の授業の中でも、特に手強い要素が詰め込まれていると感じ、興味を持てないどころか触れる前から拒絶感を抱く生徒も多いようです。その漢詩を実際に作ってみることは、自分とは遠いところにある漢詩を身近な文学に変え親しんで読んでいく上で大きな助けとなります。この教材がCさんの指摘するゲームの取り組みやすさ、Tさんの指摘にある創作の面白さなどを引き出す授業の助けとなることを願ってやみません。

〔おわりに〕

皆さんのお話を聞いていて、日々のさまざまなご努力に尊敬の念を抱いた次第です。と同時に、あらためて文学教育の困難さと必要性を痛感しました。文字を読むことに抵抗のある子供が増えていることは、かなり前から問題視されていました。今では雑誌どころか、マンガさえ読まない。当然、小説には見向きもしない。そもそも「読むこと」が娯楽の範疇から外れつつあります。電車内で新聞や文庫を読む姿が急激に減り、ほとんどの人々がスマホを開いている時代です。ではスマホで何をしているかというと、ゲームだったり、動画を見ていたりするのではないでしょうか。しかし、現代のサブカルチャーで大きな比重を占めているアニメやゲームにおいても、その骨格を作っているのは「物語」です。その物語に磨きをかけ、日本語の可能性を押し開き、新たな表現の世界を開拓しているのが「文学」です。まずは物語の面白さに目覚めてもらうこと。そして、その物語を表現するにあたってどんな工夫がなされているのか、気が付いてもらうこと。言うは易く行うに困難なこの課題について、ともに考え続けていければ、と思っています。（一柳廣孝）

現職教員である修了生の皆さんにお忙しい中、集まっていただくのは申し訳ない気持ちもあったのですが、当日、お会いしてみて、昔と変わらない丁々発止のやりとりと、大きく成長した教員としての自覚と自負に満ちた発言とを聞いて、座談会を開いて本当によかったと感じました。私は漢文という領域が「最高に面白い！」と思ってはいますが、同時にその面白さを伝える困難にしばしば打ちのめされてもいます。座談会の中でも出席者の皆さんから、子供たちに文学教材を面白いと思わせることの困難さと、そのために工夫する楽しさが繰り返し言及されており、きっとこれは普遍的な、恐らくは永遠の課題なのだろうと感じました。でも、だからこそ戦う価値があります。文学教育のためにいま私たちができること、あるいは文学教育がいま未来のためにできることはまだまだいっぱいあるはずです。これからも手強くも悩みがいがあるこの難題について、皆さんと一緒に取り組んでいかせてください。

（高芝麻子）